

令和6年度 三木市特定教育・保育施設評価 目標達成計画

(園所名) 自由ヶ丘認定こども園

観点	②異年齢集団での遊びや生活を通して社会性を培う教育・保育
項目	内 容
園の現状や取組、課題	・ 早朝や夕方、日中の活動で異年齢保育を行う中、互いを少しずつ知り、関わりが広がっていく姿が見られる。 ・ 個々の成長発達を見ると、自分の思いを主張しすぎる子どもや自分の気持ちを飲み込んでしまう子どもなど様々な姿が見られる。子どもが自分の存在を肯定的に認められ、心が支えられていると感じられるようにしていくことが課題である。
目標	・ 異年齢保育の中で、他者と関わる力を育み、人の役に立つ喜び、認められる安心感を味わう。 ・ 自分と他者のどちらもが大切な存在と知り、互いに認め合い、助け合う温かな関わりの中で、安心して園生活を送る。
目標達成に向けた具体的な取組内容	・ 互いに関心をもち、交流が深められる環境づくりをするため、3,4,5歳児を縦割りチームに分けて、一緒に遊び生活する機会を設ける。 ・ 朝の時間を使って年下児と年上児が関わり合い、コーナー遊びができるような環境を設ける。 ・ 夏に年長児が廃材等で作った遊びに0～4歳児を招待し、互いに関わる楽しさを味わう。運動会で、年長児が0,1,2歳児や3歳児との関わりを深め競技を行う。 ・ 子どもたちが互いに認め合い、助け合う関係を築くために保育者は、それぞれの思いを大切に丁寧な対応を心がける。
成果	・ 縦割り活動では、初めのようにお互い関係性が、1日通して一緒に過ごすことで名前を呼び合い距離が縮まった。縦割り活動以外の場面でも、声を掛け合う様子が増えている。 ・ 朝の時間の関わりでは、1歳児が、ブロックやままごとを楽しむ年長児の姿をじっと見つめ、同じようにしようと挑戦して刺激を受けていた。4歳児や5歳児は、乳児にも思いがあり、良かれと思ってすることが相手を嫌な気持ちにさせていることもあると学んでいる。 ・ 夏に5歳児が作った遊びに年下児を招待し、おばけ屋敷迷路で、乳児が怖くないよう優しいおばけが登場したり、その他のゲームではルールを丁寧に説明し、泣いている子どもに「どうしたの？」と声をかけたりしていろいろな関わり方を学んでいた。問題が起きた時、保育者が全て教えてしまうのではなく、「泣いてるね。」と子どもたちに投げかけることで、5歳児は、「一緒にしてあげようか？」や「このゲームは休んでいいやん。」「そしたら、おみやげ(景品)もらわれへんやん。」など意見を出し合う姿が見られた。 ・ 毎年、運動会に異年齢の競技を行っている。今年度の年長児は、1,2歳児の背の高さに合わせ、姿勢を低くして一緒に競技を楽しんだり、背伸びをしてゴールテープを持ったりする姿が見られた。その他、かけっこでは、5歳児と3歳児がペアになり走った。5歳児は、3歳児がより速く走ることができるように後ろを振り返りながら走ったり、転ばないように後ろから見守りながら走ったりする姿が見られた。3歳児は、5歳児と一緒に走る楽しさを味わっていた。 ・ 4,5歳児で、芋ほりをした。5歳児が芋ほりの仕方を教えて、4歳児のサポートした。掘った芋が小さく残念がっている4歳児に、「掘るのがうまいから皮が削れてないよ。削れたら腐ってくるんやって。」と芋ほり遠足でエコファームの人から教わったことを活かし、4歳児の頑張りを認めて安心させていた。 ・ 異年齢交流での関わりの中で、自分を大切にしてもらえる経験から、“自分も相手も大切な存在”と感じることができ、思いやる気持ちを抱くことができている。
評価	子どもたちが主体的に話し合いながら活動している様子があり、その様子がドキュメンテーションにつぶさに記録されている。先生方が子どもたちの声を聞きながら、子どもたち自身も年下の子のことを聞きながら活動しているのがわかる。3歳と5歳、4・5歳と乳児など、さまざまな組み合わせで異年齢活動がなされており、一つ一つにねらいをもって活動が進められている。その結果、子どもたちの間に思考力と思いやりが育っており、小学校へ向けて必要な資質能力が培われている。お互いを意識して生活することで、他者に関心を持ち、客観的に考えられるようになってきているといえる。また、子どもの育ちを中心にして保育が計画されており、効果があらわれていると感じられる。今後も子どもたちと共に保育を創り上げていっていただきたい。